

隣の絲

泉鏡花作

全一章

「……此處だ。」

「此處だ——此處だ。」

「——今だから、……」此の聲の意味が言へる。が、山を揺り巖を削る風の中に、囁いたのは、宛然砂利か木の葉で、「こゝだ、こゝだ……」と雨戸を叩くやうな音であつた。

眞南二里がほどに海をうけ、後三方を山に包まれた、もの靜な温泉の宿の夜半である。私の居たのは、築山づくり、池に對した、その南向の座敷であつた。

緋鯉でも、眞鯉でも、いま池に飼つた小さなのが、追つて六七尺にも成るだらう、其の頃には、青銅製の鯉の像など建つて、其の口から噴くのであらう、瀧がかりに巖を組んだ噴水が池の眞中に構へてある。

が、資本の掛つた其よりも、風情は軒先の梅の老樹  
で、これが、ほゞ温泉の年齢を想はせて可懐  
い・・・・。たゞし此の面の座敷は皆古い。汽車の  
時間表、旅行案内の前後の頁だの、停車場の建札に、  
新館、別邸、増築などと名乗つたのは、漫歩の出入  
りに、光る硝子戸、輝く甍を、他所の窓、高嶺の花  
の趣がある。けれども、腰を曲げた梅の幹に、どの  
枝一つ、裂目折口の見えないのは、總三階を堆く載  
せた此の廻り縁一棟の、つい先の年の大地震に、傾  
きはしても倒れはしなかつたことを保證して頼もし  
い。尤も千石積の帆柱ぐらゐな大丸太が三本まで、  
突支棒に、廣庭から、壓へて居るし・・・・あの  
地震のあとでは、開東被害區域で、曲りなりにも家  
屋の無事だつた湯治場は、何處へ行つても、其處ば  
かりは地下が一枚巖だと言ふさうであるから、ぐわ  
ら／＼と來た處で、右の一枚巖を底にして、屋根ぐ  
るみ家を持上げるやうなもので、すぐに突支棒を帆  
柱に立てて、南海に浮んで泳いでも仔細はない。

況や、凄いには凄いが、こればかりの凧は、もの  
數ではない。

また、不思議なほど戸障子は鳴らなかつた。  
低い聲も聞えたのである。

寝しなに、拭込んだ山道のやうな上り下りの長い廊下を、浴室へ通つて知つて居る。途中は何處も、ばた／＼、がら／＼とはためいた。新築、別館、皆それなのに、中でも古家の此の一構の騒々しくないのは、つい鼻の先の縁の外にも一本ある、遅い突支棒の奇特であらう。

胃腸の持病と、かてて加へて不眠に悩むので、心を静に、氣を休めるために、湯治と申出るほどでもないが、内端な怠惰に來たのである。が、前夜も、昨夜も然うだつた。寝られないのは風が騒ぐ所爲ではない。

寝返りしては幾度も枕頭の時計を見た。――  
午前一時を過ぎた。――家中寂と、寝しづまり、臺所に翌日の味噌摺る音も留めば、犬の遠吠ばかり遙に――と、むかしの道中記にお定りの刻限となると、……時代は違つても、家を出てから

今夜が四晩と云ふ旅の心に澤山な差違はない。・・  
・・・三度時間を見たが、三度とも同じ二時までの  
間であつた。時計が留つたのではない。あの屋の棟  
が三寸さがるとかで、長き夜の脈が沈むのである。

「・・・・・此處だ、」

「此處だ、此處だ。」

と言ふ。

吹きなぐれに、ごと／＼敲くやうな聲は、丁ど板  
縁の柱に掛けて、あの大丸太が池の縁から及び腰に  
下屋の廂を壓へた、其處の、雨戸の外で響く。

私は縁を衾の裙にして、低い枕に二いて居た。

—— 賊だ ——

「此處だ、お。」

「お、此處だ。」

一呼吸のうちに、再び言交はず、ものに氣競ふが  
如くにして、其の一人でないのに、私は確に賊だと

おも  
思つた。

誰も知つた、鶏の宵鳴と云ふことがある。黽の一  
鳴と云ふ事がある。俗にいづれも火に崇ると云  
ふ。．．．．．實は日が暮れて全館廂に籠つた頃か  
ら、ふと希有な聲を耳にした。．．．．．と云つて、  
何も聲が不思議なのではない。時季が變なのである。  
一しきり、一しきり、十ウも二十も、いや、百も二  
百も團つて、集いて、蛙の鳴く音が、があ／＼があ、  
があ、があ／＼があ、があ／＼と、庭に背戸に、裏  
山の懷に、また向の峰の背に、田に畑に、――  
湯の町を貫く、谿河の流を吹切る絶間は分けて高ら  
かに、風の上に／＼聞こえたのであつた。

―― 今頃可訝しい。

何う聞直してもすだき鳴く蛙の聲で、海から潮が  
さして来て、巖からも、地からも一面にぶく／＼と  
波が湧きもしさうに、．．．．．があ／＼があ、が  
く／＼があ、があ――と聞える。どゞツと風が  
吹き廻る。．．．．．

「蛙の鳴くやうな聲がしやあしないかね、．．．

・ ・ ・ それ、するだらう。」

「さあ、然うおつしやれば・ ・ ・ ・ ・ 何ですかね。」

晩酌の時だ　　―　　お給仕は縁の方へ、ふとつた  
頬邊を横へ向けたばかりで、一向に氣がないから、  
其切にした。が、矢張り聞こえた。・ ・ ・ ・ ・ 酒の  
あとでは、赫と、身うちも汗ばむばかり、陽氣も六  
月ぐらゐに感じられて愈々をかしい。これは、早く  
東京へ歸れ、と云ふ謎かも知れない。・ ・ ・ ・ ・ とす  
たノ、廊下を一廻り、洗面所の硝子窓から、冷い空  
に、きらノ、揺光る星の影を見た。その星が鳴くや  
うに、矢張り何處ともなく聲が響いた。おなじ事を  
三度まで繰返した。頭を冷しても聲は留まぬ。お恥  
かしいが、實は地震を憂慮つたのである。

―　　十二月に蛙の聲　　―

だから、私は賊だと思ふと、却て莞爾して、する  
りと半ば床に起きた。何か變つた事がなければ可い  
がと思つたのが、もの盗である。・ ・ ・ ・ ・ だから

わたしは莞爾して、するりと起きた。

水を潜つた縞ものだけけれど、着て居る寢着は乏しい鞆にへし込んで持つて出た。……贅澤を云ふではないが、旅籠で貸すのは、手入はしてあつても、何うかすると……處ではない、時々襟に使ひ汚した楊枝がさし棄てに成つて居る、二本、三本、虱ひねりに氣にすると、むず／＼と幾本も、揃つて、縫つて、潜つて、衽さがりに裾にまで蜈蚣のやうに這つてでる。これが、ぷつ／＼と手に觸る心持と云つたらない。

—— 迫つけ、此の篇へ顯はれよう、女主人公なども、震災後の事欠に、旅籠で浴衣を借りて、被ると……夏の事で……鏡臺を斜に、坐つて、掛けて、すつと立つて、襟を合はせようとして、あ、と云つて、爪立つて身悶えした。齒あかの堆い古楊枝のぶつ／＼と並んでこびりついて居たのが、胸先から乳の上を、ぞろ／＼と這つたのである。

私は一所で知つて居る。眞白な處が、斑々紐のや

うに赤くはれた。

で、持参の寝着で、――家内が掛けかへてくれた襟だけは艶々と黒い。

と思はず引合はせて扱いた胸も、透通るやうな意気がある。

―― さあ、来い――

これなら遁げしなに少々ぐらゐ疵を負つても然まで見ぐるしくもなからう。敵手も見定めないで、帳場へ飛出す人騒がせには、些と更け過ぎても居たのであるから。

しかし、尻は血を浚つた。

「手か。」

と雨戸の外で、

「手を、へし曲げるか。」

と同じ聲を續けて云つた。

「うむ、口か。」

と他の聲が、



「口を縛るか。」

と又續けて言つた。

「舌。」

「舌。」

殆ど同音である。

「舌を捻れ。」

「舌——」

一秒の間を寂然とした。ぐわツと吹きたけて海へ飛ぶ、風の音。

私はこゝで、襖一重、隣室の若い婦人と、其の叔母と云ふ、年上の女が事を云はねば成らない。

彼奴等は強盗よりも、猛獸、惡鬼である。

其の彼等の風采は、大略と雖も想像の限りでないが、苟も、夜討をかけた、坂東太郎、相模 Ruby を襲ふ、と云ふのに、寢不足で目の窪んだ、胃弱の下腹を、湯で暖めるやうな、けちな意氣地のない、

版畫家輩は、「此處だ、此處だ。」と云ふ以上は、既斥候の松明は届いて居よいうのに、些と役不足ではなかつたか。言ふまでもなく、遺恨を受けるほど偉くはないのに——心得ぬ事と思つたのさへ、彼等が知らば、却つて自負する、と言つて嘲り笑はう。

其の目的は、肉であつた。

手、手、口、口、舌、舌、と聞く下に、忽ち俎の上に置かれよう、其の光景さへ、生々と、血を垂らして、目に浮んだ。

然も私は、其の手、口も、舌……とは云はぬ、足さへ乳さへ、此の版畫家は知つて居た。——

こゝの温泉は、湯玉をたてて、透明に湧返るのを、數ある浴槽へ灌いで、尚ほ噴き溢れるのを谿河へ捌くほど豊富ある……左右に、所謂家族風呂を聯ねた廊下は、見ると、面を打つて、湯氣が眞綿の如く、圓く渦巻き、柔に靡いて、蒸れ惑ふのが、時とする、幾條か白い女の姿に似て、ふうわりと絡ひ、ひた／＼と客を包むのである。——

前刻いつた寝しなであつた。入込の大湯の扉を、  
がたりと開けると、からんとして居た。拭つたやう  
に湯を既に落してある。むかうの奥を四五段下りる  
と底湯があつて、その圍の板屏風を越して、ほんの  
りと湯氣が立つ。が、中に婦の聲がする。

扉口の棚に紅いものが、ちらり……

「これは、御先客だ。」

開けた扉を、ドンと閉めた。然うすると、明い洞  
穴の底から、高調子で、

「旦那、お入んなさい。旦那。」

聞覚えた、そして馴染の、近い頃まで横濱の何と  
か工場に、電氣を扱ふ職工だつたと言ふ、年の少い  
風呂番だが、かけかまひのない聲を掛けた。

「  
」

「旦那々々、構ひません。」

「何、可んだよ。」

「構やしません、私も入つてまさ。」

「まづ、可し。」

廊下をあとへ引いて、

「きみは、職業だ。私は遊びだ。」

「いゝえ、旦那。」

と又聲を張つた。

「私も遊びです、浸つて居るんです。」

成程、……風呂番が相伴して居る。其處で

大膽になつて、御免下さいと、股を曲げた女像が二

體、狛犬の如く控へた暖い池へ密と入つて、背後向

に屈んだ。此の湯舟は小さいから、向合つて殆ど風

呂番と鼻を突き合つた。と位置も　　風呂番は

長々と仰向けに足を踏伸ばして　　正面に二個

の像を拝して居る。……色のやゝ浅黒い束髪

の叔母君の方は、私が浴る時、やゝ斜に背筋を捻つ

たが、若い貴婦人のたつぷりと大きく白い方は、澄ま

して、ざぶ／＼と手拭を使つて居た。

事ごとくに至ると、肉體は女の武器であるらしい。

若い貴婦人　　断つて置くが、襖越で様子は知

つた　　勿論、御主人は養子ださうである。

處で、向うむきに壁ばかり睨んだ版畫家は、しかながら、白粉のやうな四方一面の化粧煉瓦に細く藍の縁を取った浴室を、宛然積雪を切つて、層に青味の透通る裡に、雪女郎の話を出して、湯氣のちら／＼とかゝるのを其の影かと思つた。

私は生憎、雪國に生れたから、何うも形容が些と冷い。せつ角此の豐滿なものを、もつと、ぬく／＼と温い、じわりと白脂の垂れた、蒸上るやうな描寫をして、讀者を蕩然たらしめ得ないのを遺憾とする。第一恁う云ふ夫人に對して、雪だの梅だのと云ふのは失禮に當る。

やがて版畫家が、尻は端折らずに遁出す時、叔母君はもう廊下に立つて待つのに、やゝしばらく姿見の前に立つて、梳つて居た夫人は、・・・待てよ、漸と暖い處を思出した。そのまだ湯氣をからめたのは、さら／＼と降る雪の中に搗立ての餅であつた。が、ひらりと膚の緋縮緬、（いや慌てるな、）浮模様のあるスカウトを、颯と捌いて、下半身を、借りた孔雀の尾の如く澄つたのであつた。

―― 其の今、今其の、手を、口を、舌を、且つ挫ぎ、且つ噛み、且つ啖はむとするのである。

時に、彼奴等の松明の占は間違つて居る。熊坂長範の末派は、こゝに取るに足りない胃腸の弱蟲のあるのを知つて、それが睡眠不足病患者であること忘却した。唯手で一つ隔ての襖を敲くだけで、睡を覺ます注意も出来るし、帳場へ出掛けて應急に防禦工事をさせても可い。自分出向くのが面倒なら、室内電話を強くけたゝましく壓しても可い。尤も此の電話が約束の通り鳴るか鳴らないかは未だ試みては居なかつた。何にしても、僅少な手間で、恚うした場合には最も人氣のある……西洋では騎士と云ふ、岩見重太郎に扮し得るのは容易かつた。

其處で、諸君は、其のどの方法を取つたと思はれる？ 否、否、版畫家は、

―― ふゝん ――

と頷くやうに白く笑つて、故と小さな音も立てないやうに燐寸を燃して、他所ゆきの舶來煙草を吸つて……悠然として床の上を棧敷にした。

露骨に言へば、風の怪しき密語は、口を箝し、舌を封じ、手を縛して、婦人を凌辱しようとするのである。．．．と知りつゝ救はうとしないのか。諸君は立處に、こゝで此の篇を取つて擲たうとさるゝであらう。

しばらくお待ちを願ふ。．．．しばらく。．．．簡単に私に言分がある。それには、此の廣莊なる旅館に於て、如何にして襖一重、貴婦人と席を接し得たかについて語らなければ成らない。私は知らなかつた。――不景氣々々々と言ひながら、湯治場も、此の邊は繁昌で、本來は豫め座敷の都合を聞合せなければ不可ないのださうである。久しぶりで漁船の水脚の、雲に暢行く海を眺め、やがてほとばしる清流を山間にさかのぼつて、其のまゝどぶん、と湯に入らうなどと云ふのは大膽に過ぎて居る。

私は玄關に立つて待たされた。其時、一足摺違つて自動車を下りた、新婚旅行らしい若い夫婦は大切な客であつたらしい、帳場に居合はせた、女房も番

頭も女中も一齊に立騒いで、ばら／＼取包むやうにして、廊下を深く消えて行つた、其切、當分のうち沙汰がない。私は疊から一段、式臺へ下りて杖を拾つたほどである。

女房が引返した。

「お寒うございます。」  
と帳場の火鉢へ自分の手の指をのばして居る。暖い土地と狙つて来ただけに、私はさして寒くもないが、

「然やう。」

と言つた。

「まあ、何うぞ、お焙りなさいまして。」

何ういふものか、私は外套を被たまゝで、帳場の火鉢に當るのは大嫌だ。よそから歸りがけを帳場へ坐らされて、滞つた下宿料の督促を受けた輪廻の業であらうも知れない。

「座敷はないのですか。」



「え、それが旦那。……唯今、都合をし

て居りますから。」

「成程。」

「すぐに、伺いたしますから。」

「それは何うも。」

いや、私は相當小男だが、身體が玄關一杯に邪魔に見えて、突立つて居て、遣瀬がない。

以前仲の町の藝者で、いま踊の師匠をして居る婦  
が、……春、遊びに来て話したのは、去年  
夏熱海へ出掛けた。一寸似たやうな事に出撞した。  
小柄もよし、婦の事だから宿の玄關に立たせられた  
のではないが、雑と行燈部屋と言ふのへ通された。

いまに何うにかすると、云ひ、追追、ふとん、  
煙草盆、茶道具、團扇を運びつけたのださうである。  
蒸れるやうに熱い。向うも隣も人目があつて、背負  
上も解けない。――どんな都合だつたか其の時  
はお師匠さん一人であつた――幾度手を敲いて  
もおなじ返事だから、自分ですた、帳場へ出向い  
た。――聞いておくんないよ……と慥

う切出して、．．．可ござんすか、東京のバラ  
ツクで、あくせく立働いて、暑くつて遣切れないか  
ら、たまにや、一日、素裸になつて息をつきたいと  
思つて来たんですのさ、工面を察して下さいよ、部  
屋がないんなら、何處か涼む處を探しに行きます、  
此家に御厄介は掛けませんから。――即座に解  
決した。簡潔明快である。

私は其の意氣に恥ぢる。

たゞ女房が、何處か一寸婀娜だつたばかりではな  
い。争闘心に缺けて安佚を貪るからである。しかし  
お師匠さんの場合は、番頭が小意氣でなかつた、と  
思はれない事もない。

時に可恐く不人相な、その癖、ぐにやノと腰の  
伸縮みをする番頭が取つて返した。女房と二三ツ囁  
いて、

「ぢやあ、旦那何うぞ此方へ。．．．」  
「こゝかい、番頭。」

私は思はず然う云つて薄暗い小部屋を見込まねば

ならなかつた。六疊敷の汚點だらけ、焼焦だらけの古畳は可として、隅の方には、糊で膏藥を當てた處がある。縁のこげた長火鉢には蜜柑の皮が散ばつて、これぢやお師匠さんの、のちに所謂行燈部屋だ。而して、火鉢の傍に、鬱金の袋を掛けた三味線が一挺投出してあつた。唯見ると、むつと其の邊が生暖かい。木賃で居た瞽女どのが、いま立違つたと云ふ模様である。

「さびた庭を御覽なすつた處は、また、一寸見霽がようございます。はい。」

「贅澤を言ふんぢやないがね、——番頭。」

「御意にめしませんので、へい。」

「こまる、御意と云ふ柄の客ぢやないがね、これぢやあ、」

「では、一寸お待ちなすつて。」

膝頭で手を摺つて、腰をぐな／＼驅けて行く。私は瞽女部屋を陰氣に視めて、成程こゝ等が相當かと鬱いで居た。

其處で、廊下を廻り曲つて、漸と案内されたのが、

いまの座敷で。．．．葉の落ちた軒の梅の年齢を直に數ふる風流は知らないまでも、庭の南面が、ぼつと冬霞して、對の屋二階造の寮構なる折戸口に、垣も隔てず南天燭の實の房々としたのが眞紅な艶を漲らして、下葉もちら／＼と紅に、薄色の山茶花と枝ずれに影をかさねて咲いて居るのを、美しい神巫のイんだやうに妍麗に見た。

何だ．．．．これほどの座敷があいて居るのに、それも二階三階とも望まない。おなじ平屋續きでありながら、チヨツ舌打などしたのは矢張り平民の癖で、．．．．廻縁の角を取った十疊が東に、（眞中が此室で）もう一室、八疊が並んで居て、後に、其の八疊も御自由に、と女房が挨拶に来て、隔てを開けひろげて、然う言つてくれたが、何番、へーい、ばた／＼、お煙草盆とおつしやるよ、へい、ばた／＼。一區の二三階をかけて、膳の出入、床の上げ下げにも、受持四五人の女中達が往來の足溜り。時々枕などがコツンと飛込む階子段の下だから自由過ぎる。要するに、貴婦人も御同然に、思ふやうな座敷がなかつたらしい。――其處で、すぐ襖一

重とへの私わたしが入はいった室へやは、とに角かく、あとで別べつの客きやくは通とほさない約束やくそくであつた。――警こ女ぜ部べ屋やから、二度どめに番頭ばんとうの驅出かくだしたわけは、貴婦人きふじんの諒解りやうかいを求めたらしいのである。

襖ふすま一枚まい刺あまつきへ欄間らんまが透すかしてあるから、隣となりと雖いへども相あひき客やくで、これ下世話げせわで言いへば貴婦人きふじんと割床わりどこだ。

光榮くわうえい々々。

や、女中ぢよちゆうが廊下らうかを、件くだんの、あの三味線さみせんを持もつて、一寸小腰ちよつとこししを屈かめて通とほる……何なに、麿末そまつなのでございませうが、唯今たゞいまこれ一挺ちやうで……と、お隣となりは、つれ／＼に爪つめびきか。これは地震ぢしん以來いらいの有卦うけに入いつた、と私わたしは帯おびを解ときながら。もし此これが琴ことだつたら、坐すわり直おほして考かんがへなければ成ならなかつた。琴ことは、古道具屋ふるだうぐやの店みせか、大寺おほでらの書院しよゐんの床とこの間ま、就中博物館なかつくはくぶつぐわんで拝見はいけんするのが典雅てんがである。

難有ありがたい、お隣となりは三味線へんべんだ。

板いたは何なんだい、< R u b y > やがらの差味さしみ、< R u b y > かんばちと、鳥とりの碗わん、其そのほか鯛たひの味噌漬みそづけ、と面おも

白い。姉さん。――碗は、ばち抜きの鳥で頼まう  
――銚子は通が面倒だらう、三本一齊、工場の  
煙突、煙を立てて持つといで、と隣の三味線の嬉し  
さに、――留守の家の内の苦勞を忘れた胃弱先生  
大機嫌で、よしか、鯛ちゃん、心得たね。やがらの  
かんばち、即ち一浴仕る、と手拭も肩に掛けて勇ん  
だつけ。

トーン、トン、と調子を合はせるのが、湯から歸  
りがけに、もう遠くに聞こえる。先づ半月は逗留と、  
長火鉢と卓子臺を眞四角な一所帯にして納つた。  
が、・・・・あゝ、不可い。

前世の修業拙くして、湯上りで、一盞傾けながら、  
襖越しにおつな音じめの、其の果報としてはなかつた  
のである。

果報のない處でない。二年に一度、十日ばかり思  
ひに思つて、女房も内職がないばかり、元結でもよ  
るやうに、月末の帳面から細々と紡出した旅金を、  
胃弱の腹巻に當てた保養の湯治も、――温泉の

神にも恐れ多い、――水の泡と成る事が出来した。

翌朝、薄暗いうちから下痢をした。汽車に乗れば旅である。十里でも二十里でも踏出した先で煩らふまい、と内からも用心する、醫師にも、それ／＼相談して、時々薬の用意もした。……恥を言ふが、食べつけないかんばちは抜きにして、さゝみの賽の目ほどのな、三葉の碗を吸つたもの。中毒したのは三味線である。

諺にも言ふ、下根の智慧はあとから出る。……・・・恚うと知つたら、可い事があつた。最初の、あの、警女部屋に陣取つて、若夫人のいひつけで、女中が例の三味線を取りに来た時、上胡坐で、脂下るんだ。待つてくれ。おゝ、俺は此の長唄の三味線を的に、此の座敷を借りたんだぜ。と……言ふのである。……嘘だ。が、實は下腹を壓へおさへ、ベそを掻きながら、然う思ふことになつた。

いや愚痴はおきゝづらい上に御退屈であらう。手

取り早く、狂つたまゝに駒を走らせる事にする。隣室の夫人は、殆ど手ほどきとも言つべき越後獅子をたてつけに弾きたてるのである。トツチンテンチントチチリチン。特に音曲の心得のない私が、片假名で覚えがきさへ出来るほどだから、其の數の掛つた事は夥多しい。で、獨笑みしてエエエ・・・何とかで、ツンテンツンテレンツトン、チンチンチンチリレン、チ、シヤンと繰返す、とだけでは意味をなさない。おツくりかへし、引かき筆り、引繰り返す。が、角兵衛ではない三味線が引繰返るのである。

――聞く處によると、邸は大森邊にある、大銀行家の令嬢で、婿君は其の銀行へ至極勤勉であるらしい。若夫人は一寸面倒な病氣にかゝつて半年ばかり入院をして居たが、二月ばかり前に退院して、邸で多日保養した上、こゝへ湯治の静養、と云ふのも、丁ど當日は日曜で、私より一汽車前ので、御主人も一所に來た。しかし勤勉な紳士だから月曜の出勤を缺かすまいために、すぐ帰郷したのである。あとは、女人一人だから、よく宿のものにかしづきを托したので。・・・翌日は見舞をかねて、甲州府中から



叔母に當るのが入湯との事。―― その次手に其の叔母の數代の家柄の事まで、若奥様が、當夜お伽に、揃つて三人まで伺候した宿の女中に話すのを、罐の蓋をゴソリと開けたお茶受の音につれて、ぼつ／＼聞嚙つた次第である。が、そんな事は何うでも可い。話の間も三味線を放さないで、忽ち弾立てるのはトツチンチンで。一人の時は、それでも少しは控目だつたが、女中が帳場を片づけて、泊りが極ると、撥がかはつて、鶴龜を更に一段―― きくものには三時ぐらゐ掛つた。―― 息ぬきには松の緑……「こんなもの詰まないのよ。」とか云つて、鶴龜を又一段―― トンテテツツテチンリンリン、チリリリリテト、ツ―― ーンルン。だが、ぢやんぢやぢやぢやぢやぢやぢやぢやぢやあッ

―― と鳴る。

### 蚤虱馬の尿する枕もと

勿論、打ちまけるやうである。

―― 此のあたりから芭蕉も腹中を損じた。尿前の關は漸と越しても、これから出羽の國へ、大山

を隔て、山賊、狼の恐怖の中を、反脇差を横へた案内者に導かれて、たゞ恙ないだけに辛うじて越したあとが、尾花澤、最上川、羽黒山、月山に、影も映すか、鶴ヶ岡、酒田辿りて象潟や、西施が合歡花のさめ際に、北陸道の雪にのぞみ、それ騒ぐ、天井の鼠ヶ關にかゝるにさへ、神をなやまし病に就いて九日寝た。越後を出抜けて、角兵衛獅子に離れるまでの難行苦行は、消えも入りぬべき悩みと思へ。――此方は遠くから雷が来るやうに、搔卷を引被つて、もはや上らせたまふか、と密と枕に首を出すと、天氣がかはつて、越後の獅子は、おのが姿で、花見をして居る。お伽の女中が寝てからも、床の上で鳴らして居た。

「へい、御免下さいまし。」  
私の座敷の障子の外で聲を掛けた、聲で分る。晝間廊下々々を見廻つて、裏返つたり、曲んだり、部屋の前スリッパきちんと叮嚀に直して歩く。……芭蕉が泊つたやうな筵一枚の木賃から、五十年間に此の大旅館に仕上げたと云ふ、七十

だと聞く、色は黄色だが、肉づきもふつくりした隠居である。それが、

「大分御精が出ますね、は、は、は。」

と妙な笑方をして、隣へ入った。――えゝ／＼お精が出ますとも、今朝も御飯前からです、お媼さん。――これは二日めの夜の八時頃であつた。――いま、其のお媼さんの聲で、食後の箸がカタンと膳に納るとともに、直ちに轟き出した三味線が、はじめて音を留めたのは言ふまでもない。

然う、然う、甲府の叔母さんは、此の日午後三時頃到着して、一所に湯には入つたが、長時間の音楽で、したゝか歓迎されたあとで、辛うじて食膳についたのであつた。

「……嫁もね、若奥様、何でもかでもお手をするやうにと申すのでね、出ましたがね、あなたも、まあ、こんな年寄に、ものずきなお稽古をなさりたいなぞとおつしやるもんだから。は、は、は。何しろ、もう年でございますからね、不可ませんよ、は、は、は。然う申す口で、恚うやつて三味線を工

面して参つたのでございますから、餘り嫌でもござ  
いませぬね。――それより此方の大奥様と、お  
相三味線などは如何で。へい、然やうでございます  
か。ピアノの方だと御一所に、御もつとも様。――  
え、え、聞こえますともね、づつと帳場の方  
まで。何でございますかい、お師匠さんは。――  
へい、成程。――若手でございますね。結構で。  
あ、然う、當地の俱樂部へ横濱から出稽古に見  
えます杵屋は、明晩が出張日で。お聲がかりでござ  
いますから、世話人へ話をさせて置きました。お心  
置なうおいで下さいましと申すことでございます。

時に、何でございますよ。越後獅子を其のまんま、  
お温習のお對手をしても可いのでございます、けど  
も、それ、流儀と申す條、これがおなじ流儀でも  
師匠によつて手が違ひますし、又お弟子次第で間の  
手に加減もしますから、なまじつか横合から、年よ  
りが手をつけまして、間が一分間違ひまして、其  
の師匠に申譯がございません、悪うございますから、  
一層新しいものをね、……お遊びのうちには  
何うにか纏りのつきますやうに、至つて短いもの

を。」

「結構ですね。」

と、叔母さんの言ふのが判然聞こえた。

からごろもきつゝ馴れにしつましあれば

はる／＼きぬる旅をしぞ思ふ

「たゞ上品なのでございます、むかし御殿で教はりましたね。」

其の、から衣きつゝまでを、凡そ二十度ばかり繰返した。

「は、は、は、一寸では覚えられませんやね。ま

あ、お氣永に、また明日。……」

朝から申すまでもない、押通しひ……夜は、約束の如く叔母さんがお供で、その出稽古から凍りさうな寒さを歸つて、其の上にもた呼立てた。呼ばれて稽古に来た此の時の隠居の言葉で、音曲を解しない私の申分の敢て僻見でない事がお分りに成らうと思ふ。

「――若奥様は一體、いつからおはじめにな

りましたえ。それで……今までにお幾  
つ……越後獅子が半分、その前に、ー  
へい、鶴龜が一段すつかり。へい、はじめが松の  
緑、御もつとも。ええ、二月……二月で。へい、  
大したものでございますね。尤も今時のお嬢様  
方にいたせ……何しろお頭がようございま  
すからね、お覚えはよし、御理解は早うございま  
よ。でございますから、何しろ、へい、二月で三ツ  
半……よく、師匠もあげました。手がらなも  
のでございます。しかしね、若奥様、一體何事にも、  
間拍子と申すものがね、唯お話をするうちにもある  
のでございましてね、別して三味線でございませう。  
此の、間と勘所とがはづれては、何うにも成るもの  
ぢやアありません、そこがお稽古でございませうのさ  
ね。今時の師匠は、叱言をいふと、お弟子が下つて  
了ひますからね、何しろね、貴女、家業大切で。そ  
れにしても、唄には、ね、キンノ、聲が一番禁物な  
んでございましてね。」

眞個です、お媪さん、キンノとも、キイノとも、  
私にはもつとパイノと聞こえる。硝子で鋼線

を引こするやうな、調子の違つたソプラノとかいふので、トツチンチンも、チリリリンも、口で鳴らして糸で引掻く。唄と、節と、糸と、聲と、もろともに叫ぶのである。

もう此の朝あたりからは、叔母さんが頻に後架へ通ひ出した。温泉で暖つても、瀉泄をするらしい。・・・二時頃湯から歸りがけに見たが、叔母さんは、げんなりと、然も逆上せた顔を、細目に開けた障子から縁側へ曝して、悲しさうに甲府の空を仰いで居た。絞つた袖は、手をくゝられて、拷問をされてるやうだ。芝居に阿古屋の琴責と云ふのは、あれは、畠山と岩永の方が悩んだのらしい。障子にはたものに掛けられた叔母さんの首は人形振に苦痛に揺れて、悲鳴のかはりに、口をあけて喘いで居た。

ー ー ぢゃんぢゃんぢゃぢゃぢゃぢゃぢゃぢゃぢゃあ  
ツ ー ー すぐ座敷では、馬が尿する。

爾時も、口と、糸と、撥と、聲で、掻上げ弾立て、しゃくり上げ、トツチンチンチントチチリチ

ン。・・・

「叔母さん、何をしてんの、よう。」

「あゝ、いまね、何さ、緋鯉がね、まあ一寸御覽なさい。」

「つまんないわ、そんなもの、トツチチチチンリン。（角兵衛ノと招かれて）」

「私も眉をしかめノ、便所から歸つた所だ。敷放しの寢床へドシンと倒れた。」

こゝで、聊か差出がましいが、私は敢て流儀の師匠に苦言を呈する。弟子が或程度にまで其の藝を會得したのを認めるまでは、三味線を弄ぶのに、せめて時間だけでも制限をつけるが可い。厳しく言へば、それは弟子の私宅に於てでもである。町内領分の砦に籠られたのでは、琴を弾かれようが、陣太鼓を打たれようが、戦つて責滅ばさない以上は、苦情を言ふ権利はない。けれども、せつかくの音曲が人に嫌はれよう。流儀の衰へる所以である。ピアノなども、モツアルトでも、シヨパンでも、ヴェトウペンでも、



月光の流も、雲の波も、愛人の聲も、人魚の息吹も、  
大切な曲は、鍵を掛けて置くべきである。留守を狙  
つて女中なんどの手が駆廻ると、樂器を汚辱し、其  
の作者を侮蔑する。

——それに近所が迷惑する。

三度めに、更に隠居のお媪さんがいつた事を、も  
う一度聞いて頂きたい。——即ち風の荒ぶ今夜の  
宵の事であつたが、——

「みつちりお稽古をね、若奥様、眞個に  
お稽古をなさるには、すぱツと横ぞツぼを打たれな  
くちやあ不可ません。今時は、貴女、打つたつて、  
打たれる人もありませんし、第一打たれようたつて、  
打つ人もないんでございますからね。たゞ、神信心  
をなさいまし、……信心を。」

こんな家でも、私がこれだけにいたすまでには、  
三年の間、毎夜跣足まゐりをいたしました。

雨にも風にも一晩もかゝりません。御散歩もなさい  
ましてございませうが、此の、川についた山路に、  
大鋸神様、大鋸明神と申して、女神様ださうでござ

いますが、大工左官なぞが信仰をいたします。家を建てたいのでございますから、誰方様が存じませんが、その神様へね、貴女。．．．朝に晩に帳場から、臺所、廊下も這はねばなりませんから、夜中の二時から四時までのあひだ、毎夜願がけをしましてね。いつかは、あけ方のお月様が、ひつたりと髪にお觸りになるやうな氣がいたしたこともございませぬもの。それだつて若奥様、――家を建てると申した處で、つゞまる處は金子だけでございませう。金子で出来るのでございますよ。藝ごとばかりは然うはまありません、金子では買へないのでございませぬから、御信心をなさいまし。．．．せめて貴女、調子でも合ひませんでは見つともなうございませぬから。」

「ですから、温習をしてゐるんです！」

媪さんが寒い風のやうに消えた時、驕れる貴婦人は昂然として言つた。

「時代錯誤だわよ――あの婆さん、音楽に譜の出来てる事を知らないことよ。」

あゝ、其の越後獅子の譜にも鍵をお掛けなさいと言ひたいのである。

「ねえ、叔母さん。」

トツチンチンチントチチリチン。

二音譜、勘が高ぶつたので、叔母さんの聲は聞こえなかつた。

「ぢやん、ぢやか、ぢやか、ぢやか、ぢやか、ぢやあー」

「止せ！」

黙れ！ 騒々しい！……とうっかり口まで出ようとしたのを、朝飯前から、幾度噛殺したか知つてるか。

座敷を替へようには満員である。……まつたくの處、今夜は最う九時の終列車に間に合はない。

翌朝は早朝引上げようと覺悟をして、寢床を直させた頃、宵から三度めほどに、後架から歸つた叔母さんが湯に誘つて出た。

閑の吹く中を　――

まさかと思つたのに　――　此の話のはじめに言  
つた　――　私も一浴のあとを、豊満に暖つて、床  
に入ると、否や、となりで寢床の上で又はじめた。

「風と競争をするやうで、手が痛いほどよ。でも、  
張合があんの。・・・獨笑みして来りけりい、  
ツンテンツンテレンツトン。」

それでも、遠くで、ぼぼん／＼の十二時を打つと、  
さすがに弾留んだ。はじめて羽蒲團に心も落着くと、  
あゝ、勿體ない、贅澤なやうだが、閑は實に立派な  
音楽である。

せつかくの湯治に、何の土産もないのに、それに  
してもいま思ふと、唯一度、今日は日中に好い事を  
した。朝から、時々思出したやうに、忍んで通ふ時  
雨が来た。濡れるほどではない。私が寢着のまゝ、

戸外の谿河縁へ出た時は、あつらへたやうに薄雲の  
絹を透かして陽が射した。山は樺色を浮かせ、黄を  
敷いて、其の落葉焚くと思ふ、高く、潔く、冷い炎  
が、染めた瀧に似て、音もせず、靜に三方の山の巒  
■に隨處に朧に燃えるのは、緋葉のなごりである。  
なごりと言ふが、時節にもかゝらず、此處に盛と  
視めて可い。動かない霧は、靨黷く其の煙である、  
が、晴間の青空に凝つて、倒に樹々の紅を映して、  
薄紫を敷いて、峰に互る。而して時雨の靜寂である。  
それも又やがて、はら／＼と降りさうな。水から、  
路から、石から蒸す靄は、立つて、迷つて、山々の  
姿を海市のやうに、ぼうと描いて、往來ふものの袖  
を染め、岨を上る駒も見え、小徑を下りて來る柴刈  
つた翁も見えた。此の立體的構圖の上を、谿川は巖  
に砕けてきら／＼と光つて流る。流の崖に、コス  
モスは倒伏しつゝ、紅のサルビヤがこぼれ咲に咲い  
て、さながら枯蘆が、散りかゝる緋葉を莖に留めた  
風情があつた。

「もう二三日たちますと、お座敷の前の梅が咲き  
ます。」昨日は女房が言つた、あの、南天燭と山

茶花ちんくわとに向合むきあつて。そして鶯うぐいすも来ると言いつたが。

いや来こまい。．．．急病きふびやうの鶯うぐいすでなければ、とこゝで思おもふさへ、耳みみを怯おびかされる、三味線さんみせんに悚そつと氣きしながら山やまの方ほうへ歩あ行るいた。路みちがやゝ急きふに峻けしくなると、目めの下の流ながれよりも、袂たもとに觸ふるゝ枯尾花かれをばなの銀ぎんのやうなのがさら／＼と鳴なつた。

「お堂だうか、お宮みやはありますか、お参まゐりをする？．．．」

板いたの亂みだれた橋はしの此方こなたに、假小屋かりこやが出來でて、大工だいくたちが働はたらいて居ゐたのに聞きいた。路みちを挟はさんで、空地あきちの畑はた中に焚火たきびがしてある。立たちのぼる其その煙けむりの末すゑの、峰みねの方ほうを、指ゆびは太ふといが、大工だいくが細ほそく指ゆびさした。見みる目めに路みちが消きえるからである。而さうして、大鋸おが明神みやうじん、と教をしへた。 (これが今夜こんや媪ばあさんの話はなしに出でた大鋸神おがじんであつた。) 途中ちゆうちゆうで逢あつた、一い湧湯わきゆを汲くんで枒あぶしで荷になつた、あの娘むすめに聞きいたら、薬師やくしの寺てらを教をしへたらう。

しばらく、上のほつて藪やぶを抜ぬけて、路みちが又またあかるい。

其處から湯の町の麓を、もみぢを被いで霧に眠つた、石龜の如く瞰下ろして、私の身體は樹の間を傳ふ鳥のやうに見えた時、すぐ崖の傍を淺間に構へた、あからさまな小家があつて、孤屋の軒の下、羽目をめぐり、背戸畑を透して、一面に菊があつて颯と薫つた。……土地の人は、此の菊が好きなのであらうか。數ある旅館には却つて見かけないが、停車場から山道に入る路々の村、村、町へ来て床屋の店先、菓子屋の飾、白壁の横に、生垣に、背戸に培ひ、鉢には育てて、爛漫と咲かして居る。色は派手だが、しかし寂しい……。何の菊か餘り霜に堪へると、恚うなるのかも知れない、樺色の深く沈んだ紫である。

いま菊のとりまいた一間――二間とはあるまい、ほんのりと菊の影の暖な中に、白地の手拭を姉さん被りにした、細りと姿のうつくしい婦が、内端に俯向いて、敷いて開いて一面の蒲團に、綿を敷きのべて居たのがあつた。

大鋸明神は？

――

「此の上の、」

――

と森を教へた。爾時、淺葱の襷を取つた、手の白さは雪を綾取つたやうであつた。

二枚ばかり軒に繪馬が掛つた。いま其の繪は覺えて居ない。

「繪馬はお賣りになるのですか。」

「いゝえ、預りました。」

と、俯目に答へた、優しい眦は凜として居る。

「實に、實に……綺麗です——私は初めて見ました。綺麗な菊です。」

「あなた方、御覽なさいましては、<Ruby> 鉤のやうでございませう。お氣に入りましたら些とお掛けなさいまし。」

私は遠慮なく腰を掛けた。しかし、茅屋に參らざる坐蒲團もないと云つて、入れかけた綿を取つて、框へ敷いたのは辭退した。

「湯治をなすつて、お樂み。」

——來がけに久ぶりに逢つて、爾時此とおなじ



やうな事を云つたのは、家内ではない……其の――浴衣の襟で楊枝かぶれの出来たと云ふ、膚の白い、長唄の婦である。

ふと四邊が見られた。

「楽しみどころですか、――飛だ苦みです。」  
と幻でもない人に云つて、それから隣室の三味線を、やゝ能辯に饒舌り出した。

婦は聞いて、時々微笑んだばかりである。そのうちに、病は辛い……下腹がニゴ／＼出した。かりにこゝで、水の無心は出来よう。けれども、その一ツ先のものは、むづかしい。

「少し、腹が痛みます。然やうなら。更めてお詣りをいたします。明神様へ……貴女から。」

「畏りました。ほゝゝ。随分おいとひなさいまし。」

岨路へ出ると、下の畝りを角に取つて、其處へ上つて来る隣室の夫人と叔母とを見た。顯はれた若奥様の、長いシヨオルに搦んで、金紗の刺繡のコオト

の裾すそに、あれは？・・・うす汚よごれた黄色きいろいものは――取とつて下げた三味線さみせんの袋ふくろであつた。

殆ほとんど摺違すれちがふ時とき、叔母おばさんの方ほうだけが目禮めくれいした。禮れいを返かへして、私わたしは足早あしはやに下おりて分わかれたが、橋はしにかゝつて振返ふりかへると、野山のやまも町まちも、そのまゝに細瀧ほそたきの糸いとを亂みだした、紫地むらさきぢのつゞれの錦にしきに擬まがふ中に、峰合みねあひの一點いってんのみ、黒髪くろかみの如ごとき雲くもがある。

面影おもかげはたゞ白しろく玉たまを透すかして、それよ、わかるゝ時ときの挨拶あいさつに手拭てぬぐひを取とつた、其その黒髪くろかみは、元結もとゆひばかり島田鬘しまだであつた。

つい、・・・其その來きがけに逢あつた時ときも、

「ほこりの裡うちのバラックには、もう、・・・少しすこし身からだ體たが弱よわくなりました。年としを取とつたんです。三十さんじゅうを越こして島田しまだも可厭いやです。日ひあたりの好いい、田舎あなかみ道ちに、掛茶屋かけぢやでもして、束ね髪たばがみで、張はりものがして見みたい・・・」

私は悚然とした。もたれた欄干は搔れて危なかつた。さつと風が吹き靡いて、峰の黒髪がもつれたのである。

三十分ばかり経つと、隣室の二人はせい／＼云つて戻つて来た。疲れた肥肉を休む音がして、

「蒲團に鉋屑を入れてるんだから驚いたふ。」

「あれは、蒲の穂か、薄ですよ。至つて麤末なのは入れますとさ。」

私には綿か皆菊に見えたが。――

「賤民だわね。」

――小屋も山臺ぐらゐなんだから、温習の度胸だめしには成つた事よ。あゝ、いい心持。――

でも、まるつきし解りやしないのね……。お世辭にも、うまいとか、まづいとか言ひさうなもんぢやない？」

「然やうさねえ。」

「ニコ／＼笑つてばかり、……。少し低能なのよ、容色の好すぎるほどなのには、何うかするとあるんだつてさ。」

閑は吹出した。

雨戸をしめる前である。山々より迫る暮の色に、巖を拂ひ、梢をさらつて、すさぶ風に、たゞき挫がれ、匆廻され、飛上るやうに舞つて、噴水に吹きまどはされて狂ふ落葉に交つた、眞新しい一團の鉋屑も、私の目には、紫を絞つて、きら／＼と輝いて、こぼれて散りさうな星に光つた。

大鋸神、大鋸明神。――今こゝに、三更深夜

の凧には、却つて、その底とも云ふべき、高く神います峰の方に、斧、手斧の音、カン／＼丁々と幽に響いて、鑿、鉋の冴えのあとは、紫の菊の花弁と成つて、虚空に鞠の如く飛ぶ氣勢がする。

あゝ、猛然として思ひ得た。

「おが」と土地で訛るが故に、手斧の神と仰がるゝ、うが神は、宇賀神は、狭い私の知識によれば、辨財天、また妙音天女であらうと思ふ。

その社のつまにあればこそ、あの美女は咲きにけめ。衣さへ、布さへ、菊花の影に、綿も紫の臺であつた。

トツチンチンチントチチリチン。

ぢやんぢやかぢやかぢやか、ぢやあ ー

厩こがらしを刻きぎんで夜よるの壁かべに描えがき得えた、我わが靈れいめう妙めうなる壁へき畫くわを、瞬またく間まに擾みだ亂だして、越えち後こ獅し子この譜ふの影かげは、蠅はへになつて舞ぶ踏たふする。蚯みづ蚓ずも輪わは勿はね、蚰げぢ蜒くは反そつて踊をどる。

ー よく思おもへば、時ときならぬ蛙かへるの聲こゑも、湯ゆの神かみの叱こゝと言とらしい。ー これだから一ひと度たび怯おびかされるくらゐは構かまふまい。其そのの身みを傷きずつけない若わか夫ふ人じんの程ていど度に於おいて ー

鶏とりが鳴ないた ー

「生命いのちを奪とるまいぞ。」

「尤もつともぢや。」

同どう時じに、きり／＼きりと轉てん軫じんが卷ま戻もどつた。ひとりで響ひびいた、凄すこいやうな音ねの佳よさ。私わたしは鳥とり肌はだに成なつて、ゾツとして、樂がく器きの心こころを察さつした。途と端たんである。

拭込んだ滑かな廊下を、する／＼と、隣の空間の前を通る、幽な衣摺の氣勢がする。……。いつの間にか、一人廁へ行つたか、こんな聲音の持主は居ない、と思ふと一所に、ぱつと風を飲んで雨戸のドンはづれた音。

「あつ。」

と細く云つて廊下へ倒れた。聞馴れない聲。ぎよツとして障子をあける面へ、ぴゅうと吹きなぐつて、礫の如く木の葉が飛んだ。膝をつく、なよ／＼と、横に、くの字に倒れた島田のみだれ、鼻筋の通つた白臘の如き横顔は――目を閉ぢて、もう氣絶をして居る。峰の小家の婦である。

確と抱いた、衣は冷い、耳許の雪は暖かい。

「榎どの。」

「榎どの。畫工どの。」

榎か、畫工か、私は息を引いた。聲は三つ、影は二つ、眞暗な空室の襖際に附着いて、ものを言ふ……。呼名の怪である。眞夜中に誰とも分か

ず名を呼ぶは通魔と聞く。――此の女性に對しても卑怯ながら――答をすべきでない。私は緘黙した。

「よ、思ひもよらぬ、人違したでなあ。畫工どの。」

「畫工どの、其の女とは出あひがしらぢや。われは知らぬ。出あつたものの不念ぢやが、われらとても過失ぢや。」

「社のおほせで、藪三味線め、手一つ、口のはた捻ぢ懲らさう處をなあ。」

「よその容目よい人の生命に及んで、此の仕損ひ、たゞでは濟むまいぞ。」

「社のお叱り、啄木鳥のつゝくのも可恐い……遁げるぞ、遁げるぞ、沖の島へ。」

「流罪されよ、流罪されよ。」

「ながれよ、ながれよ。」

と囁き交はした。

「其處を通るぞ、客人。」

「可怪しい、可恐しい形を見よう。」

「よいか、目をまはすな。畫工どの。」

ばら／＼と落葉の舞ふ音に、おゝ、よろりと並んで敷居際へ出て立つたは、二個の白丁、仕丁の形、烏帽子を頸に落した、老と若きと、老いたるは鋸を肩にかつぎ、若きは手斧を脇に抱いた。見よ、見よ、扁いのと、やゝ圓いのと、搗粉木と杓子の面、禿頭の顛兀に赤毛、白毛のもじやも／＼と生えた變化のたゞ額の眞中に、一眼、目一つの裂けて爛々と輝ける凄じさを。

私は口に青苔を頬張つた。しめつた古樹の香が芬とすると、並んで、通つて、ひよい／＼と庭へ下りた。池を啾々として過ると見ると、あの、茶寮の下で、ひしと二個寄つて、肩を合はせ、手を組んだ。其處で、一呼吸して、はずんだ状して、白くひらめいて、棟へ飛上つて、すつくと立つと、肩も足もさながら、一體に附着いた、黒い杖に白旗の絡つたやうなのが、見る／＼うちに深夜の虚空へ乗つて、風に飛んだ。星のまた／＼の中に、目二つ、一つ、きらめいて消えて行く。・・・



霧が薄れるやうに、霜が消えるやうに、私の寝着は、膝の縞が透いて、黒髪の影は襟にのみ艶やかに残った。――抱上げて胸に支へた婦の姿はなかつたのである。

女中が戸を繰る音に、私は縁の柱に、茫然と凭かゝつて、吹込んだ落葉を敷いて居るのを知つた。

帳場から番頭が駆けて来た。

「旦那、お電話で。」

「電話………」

「へい東京から長距離で。」

私はわなゝきながら受話器を取つた。

――「あ、榎さん、先生ですね。此方

は………はい、姉さんが急に………もう

私………えゝ、づつと、かぜを引いて居て、晝

間蒲團の、あの、蒲團のね、綿入などしたほです。

夜中にひどく魔されましてね。あなたに、あなたに  
よ。えゝ、あなたが、急に三味線が、姉さんのが聞

きたいつて、．．．．それで、あの、何（なん）ですの、

「ー 聞こえますか。お聞（き）こえになつて ー

唄（うた）が、唄（うた）が聞（き）かせたくなつたんですつて、．．．．

夢（ゆめ）ですわね。えゝ、そして、其處（そちら）の、其處（そちら）のです

よ、．．．．お座敷（ざしき）の前（まへ）まで行（い）つたとき

あゝ、可恐（おそろ）しい、可恐（おそろ）しい．．．．然（さ）う云（い）つたき

り夢（むちう）中（ちゆう）なんです。ひどい熱（ねつ）なんです。近所（きんじよ）のお醫（い）者（さ）

様（さま）を二（ふた）人（に）まで、．．．．大變（たいへん）なんです。」

「ー ー すぐ歸（かへ）る ．．．．」

支度（したく）も、何（なに）も女中（ぢよちゆう）にまかせ切（きり）で、衣服（きもの）をあらため

ると、外套（ぐわいたう）もなしに、山（やま）の徑（こみち）を急（いそ）いだ。昨日（きのふ）の處（ところ）に

は、家（いへ）の影（かげ）もなかつた。私（わたし）は袴（はかま）をつけた氣（き）で、膝（ひざ）を

眞（ま）すぐに帽（ぼう）を取（と）つて、上（うへ）の森（もり）に恭禮（きやうらい）をした。菊（きく）は殘（のこ）

つた。一（ひと）枝（えだ）を土産（みやげ）にと思（おも）つたが、それが手向（たむけ）になる

事（こと）のはかなさにも遠慮（えんりよ）した。

七時（しちじ）に宿（やど）を出（で）る時（とき）、もう隣室（りんしつ）では、夫人（ふじん）が、目（め）一（ひと）

つ（おに）の鬼（おに）（ひとり）笑（わら）みしてエエエ．．．．） さ

へ過失（あやまち）を恥（は）ぢて身（み）を流（なが）すのに。 ー 今（いま）は、たゞ

寧（むし）ろ夫人（ふじん）の羨（うらや）むべき其（そ）の健康（けんかう）を祝（しゆく）した。

汽車から、洋々たる朝の海を視めた時、まだ船も見えぬ、あの浪の寄る沖の島根のいづれにか、目を射られた鷗の如く、二人の神ぬしの、しよぼ／＼と濡れそぼつて居なさるありさまを想つて、お氣の毒に堪へない。

窓に立つて、女神を念じた。

――霜の紫の森の梢より、鳩よ、鶉よ、鴝よ、翼迅く飛ぶ鳥の、赦免の使者の渡りますやうに――  
且つ其の人の快癒を祈つた。

――これは、榎――と云ふ、私の友達の直話である。附いて言ふ事がある。榎が驛から、其家へ驅つけた、東京の町の眞晝と云ふのに、取次につまづいて出た妹分の顔に、目はたゞ一つではないかと危んださうである。

假屋の隙間洩る日の影は、一間の畳に、殘菊を敷いて、紫の蒲團に伏した、人事不省の婦は、いま入院中である、と聞く。・・・

【完】